



# 新型コロナウイルスのもとで～わたしはこう過ぎしてきました・こう過ぎしています～

〈vol.6〉

## 小唄のお話

会員 藤田 浩司 (41期)

昭和30年代頃、小唄は、ゴルフ、囲碁と並んでサラリーマンの「三ご」と言われていたそうです。お座敷で爪弾（つまび）きの三味線に合わせて、「梅～は～、咲い～た～か～、桜～は～、まだかいな」という感じで唄い、洒落、皮肉、粋が大切とされ、たいていの曲は1～2分で終わります。

私は、事務所の所長に誘われ、5年ほど前から小唄と三味線を嗜んでいます。師匠が京都から月に1回上京し、東京の弟子達に稽古をつけます。毎年、京都の祇園、宮川町、先斗町などで一門の発表会が行われます。

緊急事態宣言が出された昨年4月頃は、在宅の時間が増え、そんなときこそ、普段の練習不足を補うチャンスだったのですが、月1回のお稽古は中止、発表会も延期となり、三味線を持つ気持ちも湧かなくなっていました。「目標」がないと「努力」はできないということがよくわかりました。

世界はまったく違いますが、オリンピックが延期となり、プロ野球の開幕が遅れ、各種大会が中止になる中で、アスリート達は鍛錬を続け、この冬には多くの競技で好記録が出ています。これは、すごいことだと思います。一流選手は、そういうことができるから一流なのでしょう。



右から2番目が筆者

その後、お稽古も再開し、なんとか発表会も開かれました。やはり舞台に立てるといのは嬉しいことです。楽屋の慌ただしさ、照明の眩しさ、来てくれた人への挨拶、弟子仲間との交流、そして、もっと上手になりたいというモチベーション。人生の幅を広げてくれます。

拙文の掲載号が発行される頃、世の中、どのような状況になっているのでしょうか。「ずいぶん呑気な話をしていたな」ということになっていないことを祈ります。

いやいや、どんな状況でもこの話は十分呑気ですよ、と言われそうですが。